

(論 文)

大正時代の流行り唄の普及状況

岩 村 沢 也

キーワード

添田唾蟬坊 演歌 童謡 俚謡 浅草オペラ

初めに

本小論は、大正時代の流行り唄の普及状況の分析を試みるものである。近年明治大正昭和の復刻版CD全集や現代の歌手によるカバー盤が発売され、それに合わせて当時の音楽への関心も高まっている。およそ100年前のポピュラー音楽の普及過程とは如何なるものであったのだろうか。

当時の国際情勢、日本社会の発展状況を概観した上で、農村部での流行り唄の状況、学校教育の浸透による「唱歌」の普及、都市部でのこどもの歌「童謡」の誕生、大正時代を代表する大物演歌師、添田唾蟬坊とそこで唄われた世相、東京庶民の娯楽となったが、映画の普及や関東大震災で衰退した「浅草オペラ」の盛衰の歴史を俯瞰してみる。

ここでは、朝倉喬司、倉田喜弘、添田唾蟬坊、添田知道の明治大正時代を扱った先行研究と近年の復刻CDの解説を手がかりに大正時代の流行り唄の普及状況を確認する。

大正時代（1912年7月30日～1926年（大正15年）12月25日）は、日本のポピュラー音楽史上、蓄音機が一般に普及する前の、またラジオ放送が始まる前の時代であり、いわゆる近代的音響複製メディアを通じて音楽の伝播がされなかった、あるいは極端に少なかった時代である。流行り唄（流行歌）は、人々の口を介して、いわばライブで、直接全国に伝播していった。

音響視覚（AV）複製メディアを介して音楽を聴取することが、音楽受容方法の主流となっている現代では想像できないが、音響複製メディアなしで、流行り唄はどのように生まれ、伝えられ、人々の口に上るようになったのであろうか。一般に、流行り唄は庶民の大衆歌曲のことと考えられる。しかし、ここでは俚謡、唱歌、童謡、演歌、浅草オペラと、できるだけ多くのジャンルを概観し、世間に流行した音楽の普及状況を探ってみたい。

流行り唄としての俚謡

大正時代、とくに一般庶民に広がった大衆音楽は、俚謡と演歌である。

俚謡とは、地域コミュニティで地域の人々の中で共有され、歌われていたものを指すが、今の民

謡の多くと違って、そんなに技巧的ではなく、曲の構成は簡素で、わらべ歌のように土地の人ならば誰でもすぐに歌えるものが多かった。

大正時代を通観すると、農業人口割合は、60%から50%に減少したが、日本はまだ農業社会であり、国民の過半数が大都市ではなく、農山村部と地方中小都市に住んでいた。国民の半数以上が、流行り唄を「地方」で歌っていたのである。人口が増加し、都市への人口移動も盛んになったが、それらの移住民は、若いときに憶えたふるさとの歌を、都市に持ち運んだことだろう。

また農村部で良く唄われていた俚謡は、元々その土地で唄われていた唄もあったが、古い時代に他の地方からかもたらされた流行り唄であることも多かった。とくに江戸時代後半にもなると、富士講や伊勢講、御嶽講を通して庶民も旅をしており、人々は各地の歌を自分の村に持ち帰った。また、菱垣廻船、樽廻船を通し、物資の輸送とともに、船乗りや船客によって多くの芸能が運ばれた。小原節、磯節、よさこい節等は、江戸時代の人々の移動を通して伝播された俚謡であり、それが各地の盆唄として採用されたり、収穫祭で唄われ、さらに花柳界でも取り上げられるようになった。

各地から都会に出てきた人々が交流する中で、地方の俚謡も都市部で歌われたが、流行りの俚謡は限られていた。今、日本国民が一般に「民謡」と言って、しばしばNHKなどで耳にする曲は、それぞれがかなり技巧的な曲であり、歌い方が難しく、歌うにはかなりの訓練が必要なものが多い。そのような歌は「歌い^{こた}応え」「聴き^{こた}応え」がある歌として、全国へ進出したが、進出の過程で、歌詞や節回しが変わられ、伴奏が付き、それが固定化されるという現象が伴っている。

ヨーロッパでは、民謡 (folk song, Volkslied) は、一般に歌うのにそんなに難しくないものが多い。わらべ歌のような単純な曲も多い。しかし、日本の「民謡」は、その多くは、その道のエキスパートしか歌えない。今の普通の日本人は「民謡」は歌えない。

ライフスタイルが変わり、歌で描かれた情景が生活の場から消えると、俚謡の多くは忘れ去られ、世代間で伝承されずに消えてしまったものが、無数にあるだろう。

ところで、「民謡」という言葉が、「一般に」普及したのは、戦後の1948年(昭和23年)にNHKがラジオの「のど自慢」で「民謡」ということばを使い出してからだとされる。つまり、俚謡のうち、ラジオ放送と後のテレビ放送にも耐えられる郷土の歌が「民謡」なのである¹。

また昭和23年以前でも「民謡」ということばは、一部で使われていたが、それは俚謡そのものとは異なり、俚謡が花柳界のお座敷唄に取り入れられ、三味線・太鼓伴奏に合うように編曲されたものを指していたようだ。お座敷歌として採用された「民謡」は、その時点で選択され、歌詞が選ばれ、改変され、野卑さが削られていった²。お座敷芸能は、各地方都市に存在したが、地方の名士や中央からの政府・軍・企業幹部を接待する料亭・有力旅館・茶屋等で繰り広げられていた。それは庶民の芸能ではなく、上流階層のために取捨選択された芸能であった³。

「唱歌」という流行歌

2 一方、学校を通して、「唱歌」という形で、いわば国家によって推進され、国民に共有された歌のジャンルがあった。これも広い意味で流行歌の一つのジャンルと捉えることが出来るだろう。

大正時代は、雑誌やビラ・新聞の印刷メディアを通して、歌が全国に広がっていった時代である。それらのメディアに載って伝播したのが、「童謡」と「演歌」であった。

世界史の中の大正時代

大正時代(1912年～1926年)の音楽の普及過程を理解する前提として、大正時代がどのような時代であったのかを、世界の動きと日本社会の動きから押さえておく必要がある。

大正時代を世界史の中で位置づけると、1914年から始まる第一次世界大戦（1914年～1918年）の直前から始まり、大戦とロシア革命（1917年）の大混乱期と、その後の戦後不況および国際協調の比較的平和な時代であった。日本という国家が、明治の日露戦争（1904年～1905年）に勝利し、第一次大戦中の物資供給国となり、アジアに唯一生まれた近代的産業国になり、また近代国際法を遵守し、戦後の国際連盟等での活躍を通して、西洋列強と互角に国際交渉ができ、西洋列強と対等に貿易できる唯一のアジア国家としての地位が確立した時代であった。西洋諸国に対して劣等感と恐怖感を持っていた日本人が、一気に自尊心と自信、そしてアジアの国々に対しては強い優越感を持ち始めた時代でもあった。

第一次大戦が終結すると、日本は一気に不況に陥り、1923年には関東大震災に見舞われ、東京ばかりでなく日本経済全体が大きなダメージを受け、また、その3年後には大正天皇は崩御して、大正時代は幕を閉じた。日本人は経済的にも社会的にもひどく動揺したが、その中で近代人としての生き方を模索していた。それが哲学・文学・社会評論、そして流行り唄にも強く顕れた。

この時代の日本社会を支えた日本人は、明治維新後に生まれ、明治以後の教育を受けてきた日本人であった。そして、首都東京や大都市大阪に集まってきた人々の多くが、地方出身者で、庶民には農村出身者も多かった。

当時の日本人は、日本が西洋列強に植民地化されないように、富国強兵・殖産興業で必死に国作りを励んだ世代であり、成人男性の多くは、日清・日露の戦争を経験し、銃後の女性も、社会の変化に辛抱強く耐えてきた世代であった。明治時代、日本は、西洋列強の植民地獲得競争に加わり、日清戦争（1894年～1895年）で台湾を、日露戦争（1904年～1905年）以後、1910年には朝鮮半島を、また、第一次世界大戦後は、太平洋の島嶼部と中国の青島・遼東半島を勢力下に置き、「アジア主義」の旗の下、大日本帝国の領土拡大を目指す途上にいた。

すでに1889（明治22年）に明治憲法（大日本帝国憲法）は発布され、日本は近代的立憲国家となり、翌1890年に第一回帝国議会が開かれた。しかし、いわゆる国民が主権を持つ「国民国家」ではなく、国民は天皇に仕える「臣民」とされ、また、帝国議会では、政党政治が成熟しておらず、文民統制が出来ない国家であったため、議会は混乱し、植民地を獲得した日本は、軍事作戦に多くの兵を出す様になったが、軍部が、次第に中央政府の方針とは別の意志を、持ち始めた。一方議会では、国政でも地方政治でも、賄賂が横行した。また、選挙権は税金15円以上を納める富裕層の25歳以上の男子に限られ、男子の普通選挙が実現したのは1925（大正14）年であり、女性を含む成人全体の選挙権の確立は、第二次世界大戦後の日本国憲法制定を待たなくてはならなかった。

経済状況を見ると、大正時代の日本人はまだ全体的に貧しかった。第一次世界大戦で、日本は西洋諸国に物資を供給する基地となり、好景気を迎え、戦争は工業や都市の発達に寄与した。そのような経済発展の中で、浅草歌劇が始まり、俚謡のレコード販売が盛んになる⁴。しかし、戦後には不景気が訪れ、労働者・農民の生活は苦しく、ロシア革命の影響を受けた労働争議が盛んになった。1922（大正11）年には「日本共産党」が結党する。

後に触れるように、当時の世相を風刺した添田唾蟬坊の演歌は、政治批判、庶民の困窮・そして少し生活のゆとりも垣間見えるようになった時代の、滑稽な庶民生活へと唄のテーマを移していった。

3

大正時代の東京・大阪の都市化

西洋的な近代生活が、明治維新から始まったといっても、料理は薪で調理され、女性は炊事洗濯に追われ、男性は舗装されていない道を歩いて通勤した時代であった。車や電車は、一部の大都市を除いて、普及していなかった。

東京では山手線が環状線として全線開通したのは大正14年であり、新宿・池袋・渋谷等の山手線の駅が、武蔵野台地を結ぶ私鉄のターミナル駅として本格的に機能しだしたのは、大正末期から昭和の初めである。東京郊外の住宅地が山手線を越えて西部に拡張を始めたのは、関東大震災(1923年=大正13年)の災害復興時からであった。それまで東京のまちは、築地・日本橋・八重洲・大手町・日比谷あたりを繁華街・ビジネス街に、浅草・上野・山谷・白山・神田・飯田橋・新橋・赤坂・麻布・品川等を東京市民の住宅地・一般商業地として発展してきたに過ぎなかった。隅田川以東は、本所・深川・亀戸・千住等に人口の集積が見られたが、当時の東京市の人口は、皇居の北・東・南側に集中していた。市内は路面電車で結ばれていた⁵。

一方、大阪を中心とした関西は、維新後首都が京都から東京に移転した後、若干の衰退を経験したが、大阪は、日清・日露戦争を経て、朝鮮・中国との交易や豊富な労働力の流入に恵まれ、東洋のマンチェスターと称される一大工業都市に発展した。近隣の町村の合併し、関東大震災後には東京の人口を一時追い抜いた(1925年～1932年)。日本を代表する多くの近代的企業もこの時代に大阪から生まれた。また、いち早く私鉄・地下鉄の交通網を整えていったのも、関西であった⁶。

人々の生活に目を移してみよう。大正時代は、官吏・兵隊・警官は、洋服に身を包んだが、一般庶民は、都市中心部のビジネスマンの一部を除いて、まだ和装であった。男子学生は、袴に下駄または靴を履き、女学生もその多くがまだ、和装であった。洋装に身をくるんで颯爽と銀座を闊歩するモボ(モダンボーイ)・モガ(モダンガール)が現れたのは、大正も末期であった。

大正時代には、農家の次男・三男以下が都市に出て、都市民になり、都市労働者・都市中間層を形成した。そこでは伝統的な三世同居ではなく、親子二世代の核家族が主流となり、「茶の間」が生まれ、「一家団欒」という言葉が流行った。

また都市部では、「子ども」が単なる労働予備軍ではなく、大事に育まれる存在となった。そして「手料理」「百貨店」「遊園地」「雑誌」「絵本」「レコード」等が「一家団欒」になくはならないものになった⁷。明治時代と比べると近代的な庶民の「娯楽」が急激に増えたのである。

1920年から1930年の日本全体の産業別人口割合を見ると、第一次産業(農林水産業)人口がおよそ60%から50%へ減少し、第二次産業(製造加工業)人口が10%から18%へ、第三次産業(サービス業)人口が20%から25%へ増加した。日本はまだ農業国であったが、急速に都市的な産業と都市人口割合が増加していった⁸。それに合わせて流行り歌も、村落共同体で共有される歌から、都市消費者が共有する歌へと、その歌詞内容やスタイルも変わっていったのである。

20世紀初頭 新しい印刷メディアの時代

20世紀に入ると、ポスター、雑誌、新聞、本等の印刷媒体(メディア)が都市部で急速な広がりを見るに至るが、蓄音機・レコード等の音響複製技術メディアの普及は遅れた。エジソンの蝋管式蓄音機の発明が1877年、ベルリナーの円盤式蓄音機の発明が1885年、日本での円盤式蓄音機(写音機)の輸入販売が1903(明治36)年である。大量複製技術を前提として大量生産・大量流通・大量消費が可能となり、音楽も音響メディアを通して大量複製が可能にはなったのだが、大量消費という点では、まだ黎明期であった。高価な蓄音機とレコードは、まだ庶民の手には届かず、本格的なレコード流行歌は、1929(昭和4)年の〈東京行進曲〉頃からである。

大正時代に〈カチューシャの唄〉が流行したが、日本で初めて、近代的演劇の舞台から生まれた流行歌であり、また近代演劇女優第一号の松井須磨子が歌った唄であった。舞台を見聞きた見物人は、数千人という少数であり、またレコードにも須磨子の歌う歌は吹き込まれ販売され、当時としては破格の2千枚が売れたが、全国に普及するにはその再生装置である蓄音機の普及は低く、蓄

音機の登場がこの歌の人気の主要な原因とは言いがたい。レコードは、カフェなどで掛けられたようだが、竹針または鉄針で再生される当時のレコードが、何回の再生に耐えられたことであろうか。

〈カチューシャの唄〉が普及したのは、カチューシャに扮した当時数え年22歳の歌舞伎役者立花貞二郎の無声映画を、映画スクリーンの字幕に合わせて劇場の女性歌手が歌い、人気を博したこと、また、新聞・雑誌等にその楽譜が掲載され、それを手がかりに洋楽器を弾ける者が随所で演奏し、人々がこの歌を歌うようになり、地方にもこの曲が広められていった⁹。つまり、この歌が広まったのは、東京での話題性と歌詞・楽譜が印刷媒体で広がったことに負うところが大きかったのである¹⁰。

大正時代の文明国意識・学歴社会と子どもの教育

明治維新体制下の知識人と国家エリート層は、歌も文明国として恥ずかしくない内容のものを目指す必要性を感じた。その流れの中で淫乱で野卑な盆唄や俚謡の歌詞は、警察によって取り締まられた。

また、都市に出てきて生活を始めた地方出身者は、都市生活の中で文明的に恥ずかしくない生活を目指した。庶民はまだまだ貧乏であったが、デパート、遊園地、観劇、鉄道、都市的生活にあこがれ、社会階層の上昇移動を目指し、子どもによりよい生活をさせたいと願った。生産手段を持たない都市新住民は、よりよい職を得るために、学歴によって、生きる術とチャンスを獲得しなくてはならないと考えるようになる。身分ではなく学歴が重視される社会が訪れた。「生徒」「学生」人口は増え、子どもの歌、学生の歌が生まれた。

大正時代には、ヨーロッパのフレーベルやルソーの思想の影響を受けて、新しい「子ども観」が広がり始めた時代でもある。子どもは、それまで幼い労働者として、子守や徒弟、使い走りとして扱われてきたが、大正時代には、徐々に、純真無垢で、「童心」を持つ存在として社会が認識するようになる。「子ども時代」という年齢を、社会が積極的に評価する様になった。「遊具」「子供服」「絵本」「童話」「童画」「児童劇」「文具」が生まれ、新しい「子ども」というカテゴリーの消費者と市場が生まれ、「子ども」を対象とする消費財が誕生した。そのような意味で、20世紀は広く「子どもの時代」とも言える。このような流れの中で、音楽の分野で誕生したのが「童謡」であった。

また、小学校の義務教育が既に一般化し、中等教育が普及しだし、高等教育も次第に伸びていった。そのような社会情勢の中で、「書生歌」「学生歌」「寮歌」というジャンルも生まれた。後に述べる「演歌」は、一時代「書生節」とも呼ばれ、学生のアルバイトとして存在した。

ポピュラー音楽としての童謡

すでに明治時代から、国家や教育界の立場からは、子どもの意識から野卑な歌を排除し、健全な心を持ち、また強い国民意識を育む情操教育が求められた。「唱歌」科目では、低学年用の教材には必ずしも国家主義的な臭いはないが、学年が進むにつれて、国家主義的な歌詞の歌も含まれた。また、音楽に合わせて、お辞儀をし、一斉に同じ動作をする訓練を通して、隊列行進できる身体が作られていった。唱歌には、子どもことばの歌もあったが、どちらかというところ、こどもを感じさせない歌詞も多用され、こどもの思考の成長を促そうとした。それは、子どもの情操を明治政府の方針に動員させようとするものでもあった¹¹。

しかし、大正時代に入ると、東京音楽学校出身者が、古代より引き継がれている「わらべうた」を参照しながら、「俗謡」でも「唱歌」でもない、子どものための純粋な「芸術」作品を目指した¹²。その一方で、「童謡」は 童謡・童話雑誌『赤い鳥』（1918年7月1日～1936年8月 全196冊）等を通して広まった「商品」でもあった。当初『赤い鳥』に掲載された童謡は、当時の一流詩人による作品で、詩（歌詞）だけが掲載され、それを子どもたちが、自分たちで自由に節を付

けて歌うことが望ましいとされた。また、雑誌購読者からの投稿も奨励した。童謡・童話どちらの分野とも投稿を呼びかけた。やがて、読者からは、楽譜も付けて欲しいとの依頼が来るようになり、それに答えると共に、伴奏譜も付けた歌作品も寄稿されるようになった。

このような現象を見ると、購買層は、実際には子どもではなく、新中間層や地方の名士などの、子どもを持つ「親」であり、『赤い鳥』は「親」をターゲットとした商品でもあった。親が購入して、子どもに読み聞かせ、あるいは詩に節を付けて歌い聴かせたのであろう。

子どものための歌に関しては、『赤い鳥』執筆者の間で、2つの大きな路線の対立があった。一つは、ヨーロッパ歌曲に見られるAABAなどの楽曲形式と典型的なコード進行を重視するヨーロッパ風の歌作りと、もうひとつは、日本語の自然なアクセントと表現を重視し、節は読者が付けることが望ましいが、雑誌編集部が曲を作るときには、日本語のイントネーションと強弱アクセントを尊重した歌作りを目指すグループである。前者には鈴木三重吉と成田為三、後者には北原白秋と山田耕筰がいた。

雑誌『赤い鳥』からは、西条八十作詞・成田為三作曲の〈カナリヤ〉や、北原白秋作詞・成田為三作曲の〈赤い鳥小鳥〉、北原白秋作詞・山田耕筰作曲の〈からたちの花〉など沢山の「名曲」が生まれた。『赤い鳥』は、鈴木三重吉の死（1936年1月）まで続いた。

また、童謡雑誌『金の船』（1919年発刊、のちの『金の星』1922年6月～1929年7月）では、作詞家野口雨情と作曲家本居長世のコンビで〈七つの子〉〈赤い靴〉が発表され、本居長世の娘みどりは、日本初の童謡歌手としてレコードデビューを飾り（1920年＝大正9年）、その愛らしい歌声と写真から、日本の近代アイドル第一号と言われている¹³。

大正時代後半は、レコードや雑誌等の商業的マスメディアを通して歌が広がる様になった。メディアに載ったのは、歌詞や楽譜ばかりではなく、挿絵・写真も含まれた。そこから「童謡」を歌うアイドルも生まれたのである。

新民謡・創作民謡

明治後期から大正期にかけて北原白秋等によって作詞され、さらに大正・昭和期にも中山晋平、藤井清水、野口雨情、西條八十らによって沢山の「新民謡」が創作された。俚謡の卑猥さを地元の指導的立場にある人が嫌い、新たに郷里の誇りを歌い上げた創作歌であった。地方の土地や都市を「健全」に商業的に宣伝するための俚謡風の唄である。

しかし、それらは無伴奏ではなく、三味線・太鼓・笛を伴い、さらにヴァイオリン等の西洋楽器の伴奏付きの歌となった。大正期になると大量に作られ、レコードによって広がった。

民謡には著作権が発生しないが、「新民謡」は作詞者・作曲者の創作なので、著作権が発生する。新民謡の中には「東京音頭」のように、盆踊りの曲として作られたものも多く存在する。現在では「新民謡」という用語は使われなくなったが、差し詰め当時の新「ご当地ソング」と言ったところであろうか。

6

添田啞蟬坊に見る大正時代の流行り唄の歌詞内容と庶民の情念

さて、大正時代、最も多作で国民に広く知れ渡った流行り唄（流行歌）の作者・歌手手を挙げるならば、それは演歌師の添田啞蟬坊（1828（明治5）年11月25日～1944（昭和19）年2月8日）であろう。演歌は、当初明治の自由民権運動で、唄を通して民権思想や党の方針をわかりやすく訴える「演説歌」として始まった。歌ったのは「青年倶楽部」の演歌壮士と言われた若者たちだったが、彼らは「演歌」の他に政治活動も行った¹⁴。メロディアスな歌と言うよりは、節を持ち、韻を

踏んだ詩を、抑揚を付けて唱え上げるのである。今の感覚で捉えるならば、音楽性中心の歌と言うよりも、歌詞に簡単な節まわしを付けたラップの様であり、メロディより歌詞の内容をより重視したものであった。

当初、演歌を歌う者は、演歌者と呼ばれていたようだが、大正8～9年頃からは演歌師と呼ばれるようになった¹⁵。古い演歌のメロディの上に、新しいメッセージを載せて歌うことも多い。そのメロディは、他の演歌師がかつて歌っていたものを使うこともある。つまり、同じメロディで、異なった歌が沢山生まれた。メロディは他の演歌師も借用し、また、一つの歌が社会に流布される間に、新たな歌詞が庶民によって加えられ、改変させられていったこともあった。

一方、演歌師は、オリジナルのメロディを創作することにも心血を注いだ。歌の調子は、歌詞の文字数や内容、韻の付け方に沿って生まれた。演歌師は、一般的には作詞家と作曲家を兼ねていた。演歌師は、当初伴奏楽器無しで歌っていた。というよりも、「唱えて」いたと言った方が良いかもしれない。演じた場所は、祭りの本会場から少し離れた、人の流れのある路上や空き地であり、また駅前であり、呼ばれば、各種の会合・演説会でも公演した。当初は伴奏楽器無しで歌われていたが、次第にヴァイオリンないしは三味線を伴奏に、自ら歌うか、あるいは伴奏者を伴って歌うようになった。

伴奏も、旋律をなぞるものであり、モノフォニー的なもの、あるいは旋律に少しだけ味付けをしたヘテロフォニー的なものであった。

演歌師は、自作の歌の歌詞を書いた一枚刷りの粗末な紙を、安価で聴衆に売ること生計を立てていた。明治時代は民権派の政治的メッセージを歌い込んだ唄が多かったが、一方で戦争を題材に、日本軍の勇ましさを歌う民族主義的な歌もあった。時代が進むにつれて、政治家の言動を風刺したものも多くなった。また庶民の貧困の苦しみを歌ったもの、世の中の不公正・不条理を歌ったものや、貧しい市民生活の中の滑稽さを題材にしたものもあった。ここでは、時代の空気に触れるために、添田唾蟬坊の歌った代表的な作品を、4つ紹介する。

まずは、明治時代の壮士演歌の代表曲「ダイナマイト節」(1890年)¹⁶である。

民権論者の涙の雨で 磨き上げたる大和魂^{やまとごも}
 コクリミンブクゾウシンシテ ミンリョクキュウヨウセ
 もしもならなきや ダイナマイトどん

楽は苦の種苦は楽の種 やがて自由の花が咲く
 コクリミンブクゾウシンシテ ミンリョクキュウヨウセ
 もしもならなきや ダイナマイトどん

この曲は、添田唾蟬坊が壮士演歌を取り入れて、初めて選挙運動に参加した時に演壇で歌った歌である。

次のストライキ節は、金に踊らされ、社会は乱れるが、どんな階層の人であっても、金に振り回され苦勞が絶えないことを歌った唾蟬坊の歌である。元々は名古屋の娼妓東雲^{しののめ}が米人宣教師の助力で退楼した事件から題材を取った曲である。退楼はできたが、その後の生活苦が歌われている。

7

ストライキ節（東雲節） 1900年¹⁷

自由廃業で廓はでたが^{くるわ} ソレカラナントシヨ
行き場のないので屑拾い ウカレメノ（東雲の） ストライキ
サリトハツライネテナコトオッシャイマシタカネ

高利貸しでも金さえあれば コリヤマタナントシヨ
多額議員でデカイ面 アイドンノ一
サリトハツライネテナコトオッシャイマシタカネ

（省略）

工事ごまかしお金を儲け コリヤマタナントシヨ
芸者ひかして膝枕 シューワイノ シリワレテ
サリトハツライネテナコトオッシャイマシタカネ

次は、後年ボールペンのテレビコマーシャルで、そのメロディとフレーズが使われた
1914年（大正3年）のマックロケ節¹⁸である。

箱根山 昔や背で越す駕籠で越す 今じゃ夢の間汽車で越す
煙でトンネルは マックロケノケ

桜島 薩摩の国の桜島 煙吐いて火を噴いて破裂だし^{おこり}
十里四方が マックロケノケ

（省略）

金ほしや お金ほしやの空想を 果てを足尾の銅山に
金を掘るほる マックロケノケ

（省略）

テンカンと お金をのぼす鍛冶屋さん いくらのぼしても金もてず
朝から晩までマックロケノケ

8

進み行く 文明の光か瓦斯電灯 夜を昼にする工夫さん
お前はいつでも マックロケノケ

（省略）

最初は文明の利器を捻くるような文句でスタートするが、全体としては、貧乏人はいつまでたっ

ても貧乏人で、それを笑い飛ばそうとしている。

カチューシャ節（1914年＝大正3年）

〈カチューシャの唄〉に新たな歌詞を添えて、添田唾蟬坊が作詞した演歌¹⁹

河鹿可愛や 可愛や河鹿
声を都に売られてきて 甲斐の狭間を ララ 夢になく

妻子かわいや 別れのつらさ
つらい別れに降る雪の 中に宗吾は ララ 見えがくれ

（省略）

男恋しや 人目のつらさ
口は団扇でかくしても 二つある瞳が ララ 物をいう

九尺二間も 浮き世の花か
好いた同士の新世帯 探す貸家も ララ 二人づれ

文士かわいた 三文文士
眠い眠いといいながら 筆をとるととる ララ ^{あくび}欠伸する

廃兵かわいや 恩賜の義足
いのち冥加な薬売り 人のなさけが ララ 見え透くよ

単なるコピーではなく、唾蟬坊なりの社会観察が効いており、人々が鼻歌で歌いたくなる内容である。このように唾蟬坊の演歌は単に社会を風刺するのではなく、当時の庶民の琴線に触れ、ひょっとしたら自分の身にも降りかかる状況を想像させ、自己省察を促す優れた訴求力があり、また今読んでも、当時の人々の心情が伝わってくる内容を持っている。

演歌師は、音楽理論を学んで歌を作ったわけではないが、その歌詞内容と演じ方によって、街頭での讀賣^{よみうり}を通して、歌を流行らせていたのである。

浅草オペラ

最後に大正時代に東京で一世を風靡した浅草オペラの人気について触れる。

浅草は明治大正期、関東大震災で下町が被災するまでの時代は、東京随一の歓楽街であった。大正期には、歌舞伎小屋の他に、映画館も建ち、弁士が熱弁を振るう無声映画が流行した。また西洋のオペラのダイオジュスト版を日本語で演じる「浅草オペラ」が流行った。西洋の曲で、日本人になじみそうな曲を選んで、劇中歌として歌っていたのである。

東京歌劇団が1917（大正7）年に結成され、「オペラ館」「金竜館」を中心に浅草オペラが始まった。日本の観客にとってオペラは、西洋の衣装を着て、外国の曲を西洋式の発声で歌い、外国の劇を演じるというだけで目新しく、好奇心を引くものであった。

役者は、必ずしも音楽学校出のプロではなく、街でスカウトされ、即席で舞台上に立った者も多かったという。しかし、熱狂的な「ペラゴロ」（オペラのごろつき）も現れ、雑誌『オペラ』が刊行され、俳優の人気投票もあった。西洋音楽の一つとしてまじめに鑑賞するというよりも、アイドルを見に行くような感覚が、当時の庶民にはあったのだろう²⁰。

しかし、浅草オペラは次第に活動写真にその人気を奪われた。廃業した俳優は、活動写真の弁士となった者もいる。また一方で、浅草オペラは、昭和まで活躍する田谷力三、柳田貞一、清水金太郎などのスターを生み出した。

浅草という街は、オペラに限らず、歌舞伎、演劇、落語、曲芸、漫才、ストリップと様々なエンタテインメントが集積した街であり、その流れは現在まで続いているが、関東大震災と東京大空襲で被災した。その後大都市東京は拡張し、娯楽の場は拡散し、音楽活動の場も、東京の各所に拡散していった。

おわりに

大正末期から昭和に入ると、蓄音機とラジオ放送が始まり、人々の音楽受容の方法が一気に変わる。音楽への関心は、歌詞の面白さよりも、より節回しの良い曲へ、付点音符の効いたよりノリの良い音楽へ、そして音響的により豊かな複数の西洋の伴奏楽器を伴った音楽へと移っていった。ジャズが流行り出すのも、大正末期から昭和の初期である。人々は懐古趣味は持ちながらも、次の時代の流行を求めた。

俚謡・演歌・花柳界の音楽は、それが流行った時代を生きた人々には、個人の記憶の中に強く残ったが、人々の音楽への関心は、もう古いタイプの音楽ではなかった。新たに入ってきたワクワクするリズムと大音響、演奏スタイルに人々は浮かれ出し、未来を夢見たのである。

参考資料

CD資料

- 『恋し懐かしはやり歌』日本コロムビア 1998
- 『懐かしの唱歌』日本コロムビア 2006
- 『添田啞蟬坊・知道を演歌する』第1集、第2集 立光学舎 2015
- 『六区風景 思ひ出の浅草』Gramocub 2014
- 『大正の流行り唄』King Records 2008

文献資料

- 朝倉喬司著『はやり歌の誕生』青弓社 1989
- 10 倉田喜弘『日本レコード文化史』東書選書 1992
- 原武史『「民都」大阪対「帝都」東京』講談社 1998
- 大阪市史編纂所編『大阪市の歴史』創元社 1999
- 倉田喜弘著『「はやり歌」の考古学 開国から戦後復興まで』文藝春秋社 2001
- 倉田喜弘著『近代歌謡の軌跡』山川出版社 2002
- 安田寛『「唱歌」という奇跡』文藝春秋社 2003
- 内藤高著『明治の音』中公新書 2005

- 永峯重信『流行歌の誕生 「カチューシャの唄」とその時代』吉川弘文館 2010
輪島祐介『創られた「日本の心」神話 「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』光文社新書 2011
『大正クロニクル』世界文化社 2012
青柳幸人、高橋和雄、松本泰雄著、戸沼幸市編『新宿学』紀伊國屋書店 2013
周東美材著『童謡の近代 メディアの変容とこども文化』2015

大正時代とその前後の流行歌（流行り唄）と世相

明治末（1900年～）・大正・昭和初期の流行歌年表

※作品曲数が多い添田唾蟬坊の作品は「唾蟬坊」と表記

※スペースと作成時間の制約上、作詞・作曲者名を省略してある曲もある。

※「・」でつながれた曲名は同一作詞家または同一作曲家の作品を表す。

※明治・大正時代は、曲が生まれた年と流行った年と時間差がある。各年に記された曲は、曲の成立年と流行年とが混在している。

※下線は、ポピュラー音楽史上及び社会史上の画期的な出来事を示す。

※太字は、特に有名な曲・曲集等

※年表中 添田知道と添田さつき（芸名）は同一人物、また添田唾蟬坊と不知山人も同一人物

※年表は、前頁の参考資料（CDおよび文献資料より作成）

1900（明治33）年 2月足尾鉍毒事件（被害者2千人）、3月治安警察法公布、音楽：〈鉄道唱歌〉、〈東雲節〉、滝廉太郎〈花〉、〈ワシントン〉〈軍艦行進曲〉（日清戦争勝利を記念して作られた）〈港〉

1901（明治34）年 音楽：東京音楽学校編『中学唱歌』（箱根八里、荒城の月を含む）刊。〈春爛漫の花の色（一高寮歌）〉〈日本海軍〉〈軍人勅諭〉〈箱根八里〉〈散歩唱歌〉〈死の歌〉〈大薩摩〉。演歌者が、唾蟬坊と数人しかいなくなる。5月初めて平円盤レコード作成。裸足禁止。7月伴奏譜付きの唱歌集『幼稚園唱歌』発行。12月慶應義塾のラグビー・フットボール倶楽部が外人と試合。

1902（明治35）年 1月 日露同盟、八甲田山で行軍の兵士2千余人吹雪で遭難。4月東京市街鉄道株式会社（電車）設立。5月台湾民を日本国籍に編入する。音楽：〈嗚呼玉杯に花受けて（一高寮歌）〉〈四季の歌〉〈ふるさと〉〈魔風恋風の歌〉〈ダニユーブ河の漣〉 8月 長唄研精会設立 川上音次郎一座ベルリンを訪問。土井晩翠作詞・滝廉太郎曲 〈荒城の月〉。武島羽衣田中穂積作曲 〈天然の美（美しき天然）〉「唱歌教科書（巻三）」に初出。

1903（明治36）年 ロシアが満州を占領。パナマ独立。4月国定教科書制度を設立。5月一高生藤村操が華嚴の滝で投身自殺。その後十余名の青年が追従。8月：東京市電（品川―新橋間を運転）。11月早慶戦スタート。音楽：田村虎蔵・納所弁次郎編『少年唱歌』刊。6月滝廉太郎死去。〈注意節〉〈緑もぞ濃き柏葉の（一高寮歌）〉 第5回国勧業博覧会（大阪）。東京の本郷座子どものための「お伽芝居」を開始。川上音二郎一座も子ども向けの「狐の裁判」「浮かれ胡弓」を上演。日本で初めての映画専門館「電気館」が浅草に開業。翌年から始まった日露戦争の記録映画が好評。

1904（明治37）年 日露戦争。7月たばこ専売実施。9月与謝野晶子『明星』に「君死に給うことなかれ」発表 10月千人針始まる。12月：三越デパート開業。音楽：〈広瀬中佐（欣舞節）〉、〈橘中佐〉〈日本陸軍〉、不知山人作詞 〈ロシアコイ節（よさこい節）〉・〈露西亞兵の軍歌〉・〈千鳥節〉・〈博多節〉・〈長崎節〉、〈二上がり甚句〉〈猫じゃ猫じゃ〉

1905（明治38）年 1月、旅順のロシア軍降伏。3月奉天の会戦、5月日本海海戦 新橋―下関間の直通列車運転開始、所要時間37時間。8月日比谷公園音楽堂開く。9月ポーツマス条約。初めての邦人創作オペラ、北村季晴「露営の夢」公演。10月田村虎蔵・納所弁次郎編『尋常小学唱歌』刊。11月米国コロンビア、東京の三光堂で長唄、新内、唱歌などを録音。真下飛泉作詞、三善和氣作曲〈戦友〉、〈エンヤラ節〉、神長暁月作詞作曲〈ハイカラ節〉（女子大

11

大正時代の流行り唄の普及状況

の学生、バイロン・ゲーテの詩、自然主義、セーラー服、リボン、自転車)〈電車唱歌〉〈天然の美(美しき天然)〉

- 1906 (明治39)年 1月救世軍が失業者救済のため無料宿泊所始める。日本社会党結成。3月東京で電車賃値上げ反対の市民大会。鉄道国有化実施。上野の帝国図書館会館。音楽：9月山葉寅楠、日本楽器製造株式会社(現ヤマハ)を設立。ゴールドンバット発売。ドイツのヴェガ商会、日本盤を製造発売。この年、浪花節とエスペ란ト流行。〈夜半の追憶(男三郎の歌)〉〈紅萌ゆる岡の花(三高寮歌)〉〈チャカホイ節〉〈青葉の笛〉、唾蟬坊〈四季(士気の歌)の歌(第二次)〉〈長期的な流行歌〉・(不知山人)〈電車問題市民と会社〉(ラッパ節)
- 1907 (明治40)年 1月株式大暴落。戦後恐慌始まる。2月足尾鋳毒事件暴動化し軍隊が鎮圧。3月義務教育6カ年に延長。4月三越デパートに食堂新設。食事10銭、洋菓子10銭、コーヒー5銭。5月東洋音楽学校開校。6月桃中軒雲左衛門、東京の本郷座で一ヶ月満員の客を集める新記録を作り浪花節全盛期に入る。8月「中等教育唱歌集」。10月日米蓄音機製造株式会社設立。マンドリン流行。この年演歌師バイオリンを始める。神島瞭月作詞〈松の声(ああ夢の世や)〉(欣舞節とその変化)、〈残月一声〉、唾蟬坊詞・曲〈ああ金の世や〉・〈ああわからない〉・〈あきらめ節〉・〈増税節〉・〈四季の歌(第二次)〉、〈女学生の歌〉、学生歌〈デカンショ節〉、〈ダンチョネ節〉〈故郷の廃屋〉〈旅愁〉〈野バラ〉〈我利我利亡者の歌〉
- 1908 (明治41)年 中国、西太后死。宣統帝即位。この年味の素が作られる。音楽：1月雑誌『音楽界』創刊。御木本幸吉養殖真珠始める。9月川上貞奴、帝劇女優養成所開設。小林政次郎玩具の風琴を考案。〈都の西北(早稲田大学校歌)〉〈春は春は〉、唾蟬坊〈ああわからない〉・〈オヤオヤ節〉・〈あきらめ節〉、〈シューベルトのセレナーデ〉〈残月一声〉〈滑稽当世字引歌〉〈とことん節〉〈不如婦〉、神長瞭月詞・曲〈松の声〉。
- 1909 (明治42)年 1月自動車の実用化、東京市中に自動車38台。3月森永チョコレート発売。6月両国の国技館完成し夏場所を開く。この年芸子がハンカチにいい人のイニシャルを付けるのが流行る。都腰巻流行る。音楽：11月天谷秀、近衛逸五郎編『女性唱歌』神長瞭月詞、外国曲〈ハイカラ節(自転車節)〉〈不如婦〉、唾蟬坊作〈金色夜叉の歌〉、〈人を恋うる歌〉〈スカラー・ソング〉〈ローレライ〉〈なんだなんだ節〉〈あきれるねえ節〉 6月両国国技館会館。10月伊藤博文、ハルピン駅で暗殺される。
- 1910 (明治43)年 12月東京に初のアパート5階建ての「上野倶楽部」ができる。徳川大尉初めて日本の空を飛ぶ。音楽：3月日本橋三越に少年音楽隊が生まれる。10月 日米蓄音機商会を改組し、日本蓄音機商会設立(日本コロソピア(株)の前進)。レコード価格シンフォニー2円、ローヤル1円50銭。〈間がいいソング〉〈有明節〉、三角錫子詞、ゴードン曲〈真白き富士の峰(七里が浜哀歌)〉、堀沢周安詞・作曲者不詳〈田舎の四季〉『尋常小学校読本唱歌』に掲載、〈おっちょこちょい節〉〈ふいとさ節〉、佐佐木信綱詞・岡野貞一詞〈水師營の会見〉(文部省唱歌)、〈春が来た〉〈チリップチャラップ節〉〈ハイカラノーエ節〉〈鎌倉節〉〈沖の大船〉
- 1911 (明治44)年 5月中央線名古屋まで全通。6月英国バンドマン歌劇団来日、国内で過激熱高まる。12月東京市電ストで年末年始大混乱。31日から1月2日まで。音楽：〈新どんどん節〉、唾蟬坊〈チョイトネ節〉、〈それもそうかいな節〉〈デカンショ節〉〈福知山音頭〉、学生歌〈人を恋うる歌(妻をメトラバ)〉、〈間がいいソング〉〈日の丸の歌〉〈富士山〉〈子馬〉〈浦島太郎〉〈案山子〉6月 英国バンドマン歌劇団「メリー・ウィドウ」などを公演、過激熱高まる。 5月文部省『尋常小学校唱歌』刊。
- 1912 (明治45、大正元)年 1月に中野一昌平坂間に婦人専用電車運転。6月東海道線に急行列車が運転される。7月明治帝崩御、大正と改元。大阪「新世界」「通天閣」オープン8月東京にタクシー6台出現。9月乃木大将夫妻殉死。10月徳川単位の飛行機初めて帝都上空一周。第5回オリンピック ストックホルム大会。音楽：6月大阪の天王寺公園に音楽堂を設立。日本蓄音機商会、無ラッパ型のユーホン蓄音機を発売(小売値30円)。神長瞭月・唾蟬坊詞・唾蟬坊曲〈奈良丸くずし〉、神島瞭月詞・作曲者不詳〈アイトントノー〉、〈都ぞ弥生〉〈芝で生まれ〉、神島瞭月詞・曲〈乃木將軍の歌〉〈春が来た〉〈汽車〉〈村の鍛冶屋〉〈春の小川〉、文部省唱歌〈^{ひよどりごえ}鶉越〉『尋常小額唱歌(三)』に掲載。唾蟬坊〈ちどり節〉・〈ああ無情(おじさん隠して)〉、唾蟬坊、〈紫節(チョイトネ節)〉、神島瞭月詞・曲〈新磯節〉(演歌師によって作り替えられた民謡)

- 1913 (大正2)年 1月全国新聞記者大会で憲政擁護閣族を打破決意。2月東京市内で暴動起こり各地に広がる。
7月宝塚唱歌隊結成(翌年初公演)。10月天皇・皇后高輪御所で初めて活動写真をご覧になる。音楽：〈柔名の殿さん〉、吉丸一昌詞・ドイツ民謡〈故郷を離れる歌〉〈大正節〉、吉丸一昌詞・中田章曲〈早春賦〉、〈故郷を離れる歌〉〈海〉島村抱月、芸術座を結成。啞蟬坊・後藤紫雲詞〈新ドンドン節〉。
- 1914 (大正3)年 1月桜島大爆発・死者9千人・3月上野公園で大正博覧会開く。第一次世界大戦。パナマ運河開通。12月東京駅竣工。音楽：後藤紫雲・啞蟬坊詞曲〈まっくろけ節〉、啞蟬坊詞・神島瞭月曲〈青島節(ナッチョラン節)〉、啞蟬坊詞・後藤紫雲曲〈どこまでも節(二人連れの唄)〉、島村抱月曲・中山晋平曲〈復活唱歌(カチューシャの唄、松井須磨子)〉(レコードによる初めてのヒットソング。演歌師による歌本でも普及。1914年 キネトフォンで、増井須磨子の歌う映像が残る。本邦初のミュージック・ビデオ)啞蟬坊〈青島節(ナッチョラン節)〉、作詞作曲者不詳〈おととい節〉、〈鈴の音(王様の馬)〉、西条八十詞・山田栄一作曲〈鈴の音(王様の馬)〉、〈鎌倉〉〈故郷〉〈おてくさん〉、神島瞭月詞。作曲者不詳〈一かけ節〉〈朧月夜〉、〈ホットイテ節〉、帝劇で「復活」を上演。7月 英デッカ、ポータブル蓄音機作る。欧州戦線で使用される。
- 1915 (大正4)年 アインシュタイン相対性理論発表、11月大正天皇の即位式。この年欧州大戦のため未曾有の好況で成金続出。電気アイロンで女性のパーマ流行。また、女優まげも流行。音楽：〈恋はやさし野辺の花よ〉、吉井勇詞・中山晋平曲〈ゴンドラの唄(松井須磨子)〉、小林愛雄訳詞・フランケット作曲〈コルネヴェールの丘〉(帝劇初演)、啞蟬坊〈現代節〉、啞蟬坊詞・秋山楓谷曲〈ホットイテ節〉、3月三浦環ロンドンで「蝶々夫人」を歌い好評。4月 日本楽器、蝶印ハーモニカを製造発表。米国で電気音響装置できる。
- 1916 (大正5)年 中国で文学革命起こる。この年カフェーの女給のエプロン姿登場。音楽：〈八木節〉〈安来節〉、神島瞭月詞・曲〈新磯節〉、神島瞭月詞・外国曲〈薔薇の唄〉、〈サンタルチア〉〈帰れソレントへ〉〈オーソレミヨ〉〈どこまでも節〉〈薔薇の唄〉 各地の俚謡を録音したレコードの販売が盛んになる。
- 1917 (大正6)年 ロシア3月革命。11月ロシア十一月革命 3月沢田正二郎新国劇を創立。芳川鎌子伯爵夫人が運転手と情死〈千葉心中〉。『主婦の友』創刊。5月東京芝浦で第3回極東オリンピック大会開催。音楽：北原白秋詞・中山晋平曲〈さすらいの唄(松井須磨子歌)〉、〈わしがすきなは〉〈今度生まれたら〉〈千葉心中の歌〉〈カルロスの詠唱〉〈今度生まれたら〉、啞蟬坊〈ブラブラ節〉10月伊庭孝、東京歌劇団創立、浅草オペラ始まる。浅草日本館(映画館を改造)
- 1918 (大正7)年 1月ウィルソン十四ヶ条発表。11月ドイツ降伏。第一次大戦終結。中国で軍閥戦争始まる。4月第3期国定教科書(ハナハトマメナス) 音楽：啞蟬坊(詞)・俗曲〈新深川節(深川くずし)〉、啞蟬坊詞・中川晋平曲〈イキテルソング〉、〈大正節〉〈かなりや〉〈城ヶ島の雨〉〈森の娘〉〈水藻の花〉〈煙草のめめめ〉〈酒場の唄〉〈別れの唄〉〈恋の鳥〉〈宵待草〉、宮島郁芳・後藤紫雲詞曲〈金色夜叉の唄〉(大正9・10年頃に流行)、啞蟬坊〈ああ踏切番〉、〈女心の唄〉〈浜辺の歌〉〈一番はじめの一宮〉〈りすりすこりす〉『赤い鳥』創刊、童話・童謡運動始まる(近代的子ども概念の誕生)。
- 1919 (大正8)年 1月パリ講和会議。松井須磨子自殺。6月第一次世界大戦を総括するヴェルサイユ条約。アイルランド共和国独立。9月川崎造船所の職工1万6千人我が国初の大規模ストライキ。音楽：〈女心の唄〉、啞蟬坊詞曲〈労働問題の歌〉、石田一松・啞蟬坊詞啞蟬坊曲〈のんき節〉、〈ヤナギ節〉、後藤紫雲詞〈ジョージア・ソング(バイノバイ節)(東京節)(平和節)〉、〈デモクラシー節〉〈琵琶湖周遊の歌〉〈ディアボロの唄〉〈花園の恋〉〈靴が鳴る〉〈背くらべ〉〈新酒場の歌〉〈活動節〉、神長瞭月詞・曲不詳〈アイドント・ノー〉 この年：社交ダンス大流行。新国劇で「月形半平太」「国定忠治」上演、当たり狂言となる。★「演歌師」ということばがこの年辺りから使われるようになる。
- 1920 (大正9)年 5月日本初のメーデー。1月国際連盟成立 音楽：啞蟬坊詞〈新トンヤレ節〉、啞蟬坊・山路赤春詞〈新わからない節〉啞蟬坊詞・曲〈新馬鹿の歌(はてなソング)〉、小林愛雄訳詞・スッペ曲〈ベトリア姉ちゃん〉、益田太郎冠者詞曲?〈コロッケの唄〉、〈聞け万国の労働者〉〈白雲なびく駿河台(明治大学校歌)〉〈しゃぼ

大正時代の流行り唄の普及状況

ん玉) <叱られて> <夜の調べ> <鴨^{おうりよくこう}緑江節> レコード著作権が認められ、複製レコード禁止。社交ダンスブーム。本居長世の長女みどり童謡歌手デビュー <十五夜お月さん>。アイドル歌手の誕生。高島屋・松屋・白木屋百貨店開業。

- 1921 (大正10) 年 3月足尾銅山大争議。4月メートル法公布。5月日本社会主義同盟に解散命令。11月原敬首相東京駅で暗殺される。11月ワシントン会議始まる。12月日英同盟破棄。この年耳隠し流行。街頭に似顔描き登場。音楽：野口雨情作詞・中山晋平作曲 <船頭小唄 (枯れすすぎ)> (12年に流行)、三木露風作詞・山田耕柞作曲 <赤とんぼ>、<ローレライ> <てるてる坊主>、青木存義作詞・梁田貞作曲 <どんぐりころころ>、<すずめの学校> <めえめえ児山羊> 『金の船』発刊。同書で野口雨情作詞・本居長世作曲の童謡が継続的に発表される (1921年7月号 <七つの子>、1921年10月号 <青い眼の人形>、1922年 <赤い靴>) 唾蟬坊・山路赤春詞 <新ノーエ節>、唾蟬坊詞曲 <調査節>
- 1922 (大正11) 年 「週刊朝日」「サンデー毎日」創刊。上野の博覧会で初のラジオ公開放送。3月上野で平和博覧会開く。4月英国皇太子来日。7月日本共産党結党。10月シベリア撤兵。11月アインシュタイン来日。音楽：後藤紫雲・宮島郁芳詞曲 <流浪の旅> ← <さすらいの歌>、<馬賊の唄> <籠の鳥> <靴が鳴る> <小野訓導の唄> <失恋の唄> <砂山> <留陽の旅> <ピエロの唄> <女給の唄> <捨て小舟> <メーデーの歌 (聞け万国の労働者)>、唾蟬坊・添田知道 <ペラボーの歌> 小林愛雄訳詞・スッペ作曲 <ベアトリ姐ちゃん>
- 1923 (大正12) 年 2月丸ビル竣工。4月『赤旗』創刊。6月第一次共産党事件 9月関東大震災。音楽：添田さつき詞・曲 <ストン節> <復興節> <青春の唄> <月の砂漠> <旅人の唄> <花嫁人形> <ダンチョネ節> <肩たたき> <待ちぼうけ> <夕焼け小焼け>、篠田実の浪花節「紺屋高尾」全国に流行。日本最初のジャズバンド編成される。
- 1924 (大正13) 年 メートル法の使用始まる。音楽：<月は無情> <からたちの花> <花嫁人形> 広島の演歌師頭領・秋月四郎詞曲 <ヨサホイ節>、鹿島鳴秋詞・弘田竜太郎曲 <浜千鳥>、<復興節> 千野かほる詞・鳥取春陽曲 <籠の鳥>、<小原節> <水郷の唄> <モーツァルトの子守唄>、添田さつき詞曲 <ストン節>、<浜千鳥>、渋谷白波詞・浜田さつき詞・曲 <復興節> <兎のダンス>、ベートーベンの「第九」日本初演。レコードは空気振動による平円盤録音法 (ラッパ吹き込み) から マイクロホン利用の電気吹き込み となる (音質が格段に良くなる)。
- 1925 (大正14) 年 3月東京放送局仮放送開始。7月東京放送局 愛宕山で本放送開始。第2回国勢調査 人口5973万6704人。六大学野球連盟結成。麻雀流行。洋裁ブーム起こる。音楽：<水藻の唄> <ヨサホイ節> <関の五本松>、唾蟬坊・後藤紫雲 (詞曲) <金々節>、<この道> <恋慕小唄> <赤いばら> <のんきな父さん> <失恋の唄>、石田一松詞曲 <春の名残り>、<雨降りお月様> <証誠寺の狸囃子> <被服廠哀歌>、作者不詳 <数え歌 (花子さんよ)> <♪一つとせ、人も好き好き、水仙の〜> 浅草オペラ廃れ、民謡ブーム。
- 1926 (大正15、昭和元) 年 改造社「現代文学全集」刊 (日本初) 12月大正天皇崩御。アッパッパ (普段着の洋装ワンピース) 流行し、断髪のマダンガール (モガ) 出現。音楽：<すたれもの> <男の恨み>、浜崎質詞・添田知道曲 <アパッシュの唄>、<虞美人草の唄>、星善四郎詞曲 <朝鮮警備の唄>、添田知道詞・鳥取春陽曲 <みどり節> <思い出した>、<かえろかえろ> 近衛秀麿、新交響楽団を結成。藤原義江、世界各国を演奏旅行。日本歌謡のため話題を呼ぶ。
- 1927 (昭和2) 年 嵐寛寿郎の鞍馬天狗シリーズ封切。上野一浅草間で地下鉄開通。物価カレーライス10~20銭、タクシー東京市内1円。大学授業料 (慶応) 年140円。音楽：<ヴァレンシア> <モン・パリ> <若き地に燃ゆるもの (慶応義塾応援歌)> <佐渡おけさ> <串本節> <ちゃつきり節>、中山春海詞・花沢深泉・陸奥明曲 <羊飼いの歌>、<お菓子と娘> <ヴァレンシア> 日本ポリドール (5月)、日本ビクター (9月) 創立。日本蓄音機商会在英国コロムビアと提携、国内プレスによる洋楽盤第1回発売。宝塚歌劇団「モン・パリ」上演
- 1928 (昭和3) 年 物価、蓄音機ゼンマイ式20~40円。レコードはクラシック3~4円、歌謡曲2~2円50銭。10月浅草で松竹レビュウ。6月張作霖が爆死。11月天皇の即位大礼が京都で挙行。音楽：<出舟の港 (藤原義江)> <出船 (藤原義江)> <波浮の港 (藤原義江)> <マノン・レスコオの唄 (佐藤千夜子)> <アラビヤの唄 (二村

定一)〈青空(二村定一)〉〈君恋し(二村定一)〉〈蒲田行進曲〉〈道頓堀行進曲〉(=浅草行進曲)
 1929(昭和4)年 エノケンブーム。音楽:中山晋平作曲〈東京行進曲(佐藤千夜子)〉〈紅屋の娘(佐藤千夜子)〉
 〈浪花小唄(藤本二三吉)〉〈愛して頂戴(佐藤千夜子)〉〈洒落男(二村定一)〉3拍子、ワルツの影響、〈モンバ
 里(宝塚生徒)〉〈独立守備隊の唄〉〈進軍の歌(毛利幸尚)〉

註

- 1 朝倉喬司『流行り唄の誕生 漂白芸能民の記憶と近代』青弓社1989「第七章 民謡の誕生」pp.86～97
- 2 芸者衆が奏でるお座敷芸能で、元々お座敷芸能のジャンルに存在しなかった当時の流行り唄や俚謡を「俗謡」とひとくくりにして、三味線音楽では分類していた。朝倉喬司前掲書 p.88
- 3 この他に戦前に「新民謡」ということばがあった。これは新たな盆踊り歌も含め、各地の観光宣伝のため、まち作りのために、プロの作曲家に依頼して作った「歌」である。その多くは、「俚謡」よりは垢抜けており、西洋和声に則り、西洋の曲の形式で作られ、太鼓や三味線を交えながらも、五線譜と西洋楽器で演奏できる曲であった。民謡音階等の5音音階をベースに作ってあるので、現代人から聞くと「日本的」に聞こえるが、いわば和洋折衷の曲であった。
- 4 興味深いことに、国産レコード販売の初期の明治40年代に、売れたレコードは、義太夫・浪花節・小唄・長唄といった、いわゆる邦楽のレコードだった。洋楽は外国資本のレコード会社による輸入盤に限られ、日本人の生活になじみがあったジャンルのレコードが売れると考えた国内のレコード会社の戦略を考えると、納得できる。倉田喜弘『日本レコード文化史』東書選書 1992 pp.53～73
- 5 青柳幸人、高橋和雄、松本泰雄著、戸沼幸市編『新宿学』紀伊國屋書店 2013、原武史『「民都」大阪対「帝都」東京』講談社 1998
- 6 大阪市史編纂所編『大阪市の歴史』創元社 1999、および原武史前掲書
- 7 周東美材『童謡の近代』岩波書店 2015年 pp.10～16
- 8 一般財団法人日本総合リサーチ研究所「デジタルアーカイブ生活指標 産業別就業人口割合 一農業経済からサービス経済へ」http://www.research-soken.or.jp/reports/digit_arch/pop (2016年9月5日取得)
- 9 倉田喜弘『「はやり歌」の考古学 開国から戦後復興まで』文藝春秋 2001年 pp.145～154
- 10 永峯重信『流行歌の誕生 「カチューシャの唄」とその時代』吉川弘文館 2010
- 11 倉田前掲書 pp.108～117、安田寛『「唱歌」という奇跡十二の物語』文藝春秋 pp.16～26、「唱歌」という用語は、元々は日本音楽の用語で 証歌、章歌、正歌とも言われた。万葉集で「唱歌」とは、歌の歌詞を指し、また、雅楽等では、楽器演奏を音符で歌うことを意味した。この言葉は「口唱歌」という言葉として民俗音楽や三味線音楽に残った。明治以後、教育の現場では、歌を歌うこと、またその教科を意味した。そこから転じて公立学校で習って歌われる曲そのものも「学校唱歌」ないしは短く「唱歌」というようになった。
- 12 童謡とは、歴史的なことばとしては、元々は「わざうた」と読み、「わざ」とは「子ども」ではなく「庶民」のことを表した。政治的な風刺や事件の予言を歌った歌謡、神意を遇した歌謡の意味もあり、転じて広く現在の「民謡」「流行り唄」に近い概念としてもつかわれたこともある。一方で「童謡」は、江戸時代、「わらべうた」のことも指すようになった。明治維新以降「童謡」は一時、ほぼ「はやりうた」と同じ意味を持つこともあったが、『赤い鳥』発刊以降は、「童謡」とは、『赤い鳥』に掲載されるような子どものことばで、童心を描いた、子どもの情操を育てる歌を指すようになった。しかし、一見「童心」を描いた歌であっても、大人が作ったものであり、子どもが自ら作ったものではない。
- 13 周東美材前掲書 p.125
- 14 添田知道『流行り唄50年』朝日新聞出版 2008年 p.34
- 15 前掲書 p.81
- 16 前掲書 p.34

大正時代の流行り唄の普及状況

17 前掲書 p.47

18 前掲書 p.131～132

19 前掲書 p.138～140

20 『六区風景 思ひ出の浅草』 Gramoclub 2014年 CDライナーズノート

(受理 平成28年9月8日)